

名古屋藩における薬用人参の栽培^(一)

安江政一

はじめに

人参史^(二)によると、『広参品』『日用薬日考』などの著書に尾州産人参が名古屋の薬舗に販売されていたと書いてあるから、尾州における人参栽培は早くから成功していたとのべているが、農業による安定した産出とは考え難い。その理由の一つは宝暦明和の頃行われた松平君山指導の東谷御林^(三)における大規模な人参栽培が失敗に終わっているからである。また尾張藩町触^(四)によると、人参実を薬舗におろして販売したり、農村で庄屋が栽培して製した人参を薬園に持参し、薬園が薬舗主を集めて入札販売させた例^(五)などがあるから、篤志家の栽培した少量の試験的産物が薬舗へ流出し、高価の故に永く店頭を飾っていたものと考えられる。

名古屋藩における薬用人参栽培に関する文書の紹介は乏しかったが今回、杏雨書屋所蔵の『尾州御薬園人参栽培一件綴』と『人参繁茂数改帳』および本文書関連の現地に保存されている古文書類を調査して名古屋藩における人参栽培の成功を知ることができた。

一 松平君山の人參栽培組織

東谷御林における人參栽培についてはすでに詳報^(三)したが、その実施体制にまでは論及してなかった。この栽培開始のとき、指導者松平君山は六十七歳、藩隨一の学者としての名声の絶頂にあった。宝曆十年「命を奉じて植えたる朝鮮人參を冬初めて製して上に供^(六)」とあるように、儒学者としての高名がいつの間にか本草学においても大家であるかのように扱われ、藩医の存在が無視されていた。

さて東谷御林における人參栽培の組織を吟味すると、最高指揮者松平君山は書物奉行であり、その下に上水野村所在の御林奉行水野権平が加わり、その部下の下水野村入尾に居住する御林方役人六人が栽培の作業に当たっていた。このように医師も薬園方も、そして君山直属の部下も関与せず、農民も資材の供出と日覆、垣根作りなどに手伝うだけで人參の世話はしなかった。御林方支配下には樹木の苗を育てる「樹木場」^(七)が作られ、そこで接木を行った前例が知多郡にあったがこの頃、それは中止されていた。入尾にも「御樹木所」^(八)が作られ、御林方役人の樹木苗育成への関心はうかがえるが薬草には関係はなかった。

一一 人參栽培指導体制の確立

人參生産失敗の後、藩医^{イサナ}浅井図南が薬園の管理に当るようになった。君山没後二十年、文化二年からであって、以後この職は浅井家の世襲になるとともに薬園は拡張整備された。^(九)

浅井図南は名古屋藩医としての浅井家の第二代であるが、父と別居して京都で医を講じ、藩医をつぐ意志がなかった。

この間経済上苦しみ、困窮とたたかいたながら勉学した。五十歳近くになって改めて藩医に迎えられた。このとき君山はすでに功なり名とげていたのに図南は「国中の儒者をみるに、私の右に出る者はない」と云ったという。^(一〇) 清水生なる者が君山を招いて酒宴を開き、その席へ図南も招いた。君山は大いに飲んだが図南はのめなかつた。一人の客が図南に「あなたが飲めないのは学問が君山に及ばないからだ」と云ったので図南は憾み、後詩を作つて人に与えたという。「羞与村儒為隊伍」。田舎儒者と同席して恥かしいとでもいうのであろうか。激しい対抗意識であつた。図南は京都で永らく刻苦修業したことに自負があつたから、手厚い保護の中で苦勞知らずに育つた君山を村儒と見下していたのであろう。

三 木曾および裏木曾における薬用人参栽培の成功

木曾の黒沢と荻原の両村に名古屋藩の薬園が開設されたのは天保十二年で、同十四年に人参が植付られた。^(一一) この栽培における指導組織は、付知町田口家に所蔵される『人参作立方尋日記』^(一二) に記されている。最高指導者は薬園頭浅井紫山であり、藩士吉田平九郎と松井信一郎が薬園付となつてゐた。^(一四) 簡単な記録ではあるが、嘗百社会員の二人の本草学者が薬園付になつて人参栽培に一役買つてゐたことは興味深い。

吉田平九郎は水谷豊文のあと嘗百社の指導的立場にあつた人で、本草学的図説の著作が多く、特に植物の鑑定にすぐれ、飯沼慾斎がしばしば平九郎の宅を訪ねて鑑定を求めてゐた。^(一五) 植物図譜についてはキニホン (Johann Hieronymus Knipfloh, 1704-1763) の創案になる植物印葉図五巻があり、このほか多くの昆虫図譜が残されている。平九郎は採集のため御嶽、木曾駒岳に登つてゐたから、木曾地方をよく知る人でもあつた。

一方農村における受入体制はどのようであつたらうか。この頃人参実は高価ながら民間にかなり出廻り、各地にわずかながら人参に経験のある者が散在してゐた。村では庄屋と人参に経験のある者の二人が人参植付裁許役の肩書で村民の世

話をした。試し蒔き、蒔捨てなどよばれる実験、すなわち人参が育つと予想される山地などに蒔付て観察し、このあとで農民から蒔付希望者を募った。多い者は数千粒、一般には二百から八百位で、百粒の者もあった。困窮者には庄屋が五十粒程与え、家蔭、空地などに蒔かせた。このようにして略全村民に力に応じて人参実を配分し、手入の行届くようにした。農民の自発的要求を引出してから蒔付開始を行っているところが注目される。

このようにして木曾黒沢、萩原などでは天保十四年に栽培を開始し、四年後の弘化四年には収穫を始めている。付知村ではこの成功を見て人参栽培を導入し、順調に収穫に達したが、嘉永年間に入った頃から人参相場の下落がひどく、時には投資や手間賃の半分にも及ばなくなつて人参栽培者が無くなる事態となつた。文久時代に入つてから藩役所から栽培の再興に力を入れる方針が示されたところで『一件綴』は終っている。この頃の黒沢における人参関係の文書が残っているが、^(一七)全部消失した花壇(畑)の記載が多く見られるのは、天保十四年以来十数年に及ぶ連作の害であろうか。

むすび

長野県佐久において神津孝太郎が個人で人参栽培を開始した^(一八)のは名古屋藩におくれることわずか一年、弘化元年であつた。彼は失敗にめげず、苦心研究の末成功した。この民間の個人的事業が強く生き残つて現在の長野県の人参産出につながっている。権力者による公営の人参産業は華々しく成功したが、木材産業におされたためか、江戸幕藩体制とともにあつてなく消滅した。

なおここに引用した未紹介の古文書類については、別に詳報したい考えである。

謝辞 本研究において古文書の解説と解釈については瀬戸市文化財保護審議委員村田秀雄先生の御教示を得た。吉田平九郎の事績

については飯沼愨斎研究家遠藤正治氏、黒沢萩原付知方面の調査については上松町教育委員会委員長山下生六氏、付知町田口慶昭氏の御世話になった。また杏雨書屋、田口慶昭氏、三岳村役場からは貴重な古文書類の複写提供をうけた。以上に対して厚く御礼申し上げる。

引用文献と注

- (一) 第88回日本医史学会総会、昭和六二年四月(東京)にて発表。
- (二) 今村鞆 人參史 第四卷 二六四 思文閣 一九七一年 復刻。広参品の記事は増補者熊谷慎憲が尾州で栽培している人參を朝鮮種として確認しただけで産出ではない。柴田正簡は日用薬品考の中で尾州産人參についてのべ、日光産よりよいとしている。本書出版のまえ、幕府は全国に人參生産の普及をはかる努力をしていたから、その波に乗る一時的産出であったと思われる。
- (三) 安江政一 日本医史学雑誌 第三〇巻 五〇 一九八四年。古文書『東谷御林人參一卷』の解説は薬史学雑誌 一八巻 八七 一九八三年。
- (四) 名古屋叢書 第三巻 法制編 二 町触 五四七 名古屋市教育委員会編並発行 一九六一年。
- (五) 田口慶郷、慶成『尾州御菜園人參栽培一件綴』の内、嘉永六年の留。
- (六) 市橋鐸 松平君山考 一九 名古屋市教育委員会 一九五二年。
- (七) 名古屋市史、学芸編 一九八 愛知県郷土資料刊行会 一九七五年。
- (八) 瀬戸市史編纂委員会編 瀬戸市史、資料編、一、村絵図 五六 瀬戸市 一九八五年。下水野村絵図面(天保一二年六月)に「御樹木所」が玉野川沿に記入してある。
- (九) 人參史(前出) 第四巻 二六八。本件は注二、浅井氏家譜大成には記していない。
- (一〇) 浅井国幹遺稿 浅井氏家譜大成 二八 医聖社 一九八〇年。以下の挿話も本書による。また浅井氏と菜園の関係については、図南の孫紫山が菜園奉行になったことだけかいてある。
- (一一) 現在長野県木曾郡三岳村黒沢と同郡上松町萩原。
- (一二) 長野県西筑摩郡役所編 西筑摩郡誌 年表天保期 西筑摩郡役所 一九一五年 一九七三年 臨川書店復刻。
- (一三) 田口慶成 人參作立方尋日記 弘化四年 岐阜県恵那郡付知町二八四一―一 田口慶昭氏所蔵。

- (一四) 天保より弘化嘉永における名古屋藩分限帳(蓬左文庫所蔵)によると浅井董太郎、奥詰御医師二百石、吉田平九郎、寄合百石、松井信一郎、大番百石とある。
- (一五) 小西正泰 アニマ No 一六七 五八 江戸の博物図館、吉田雀巢庵 一九八六年。雀巢庵は平九郎の号。なお飯沼慾斎著『草木図説』における人参の説明に平九郎の意見として「木曾園中に種て二十五年に及ぶものあり云々」と平九郎と木曾人參園との關係を示す一節がある。
- (一六) 飯沼慾斎は草木図説の中で吉田平九郎の意見を六ヶ所に引用している。ほかに山本容室三ヶ所、植木屋曾吉二ヶ所のみで他にないから、平九郎の植物鑑定力量がわかる。
- (一七) 長野県史編集委員会編 長野県史 近世史料編 第六卷 木曾地方 四八九 長野県史刊行会 一九七九年
- (一八) 伊沢一男 信州薬用人参と神津家 増補改訂 日本薬園史の研究 三七一 渡辺書店 一九四二年

(名古屋市立大学名誉教授)
〒489 瀬戸市原山台8-6

On the Cultivation of Panax Shinseng by the Nagoya (Owari) Clan in the Edo Era

by Masachi YASUE

An attempt at cultivating Panax shinseng on a large scale at Togokuhayashi in Nagoya (Owari) Clan had failed by the year 1770. Another attempt at Panax cultivation was undertaken by the Nagoya Clan from 1884 to 1888 at the foot of Mount Ontake. This time, the director of the plan was Totaro Azai, the head of the clan doctors. Heikuro Yoshida, a famous herbalist of the time, cooperated with this test. Working in rural areas this time, the head of the clan distributed between 100 to 1000 Panax shinseng seeds to farmers, the amount being in proportion to each farmer's capacity. Thus four years later, it was possible for the clan to begin the collection of Panax roots.